

令和 2 年 7 月 10 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2019

課題番号：26370840

研究課題名(和文)「ハディースの徒」の社会史的研究：スンナ派の形成・浸透過程の解明に向けて

研究課題名(英文) A Social Historical Study on Ashab al-Hadith: For Understanding Formation and Spread of the Sunni Sect

研究代表者

森山 央朗 (MORIYAMA, Teruaki)

同志社大学・神学部・教授

研究者番号：60707165

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：イスラームの多数宗派であるスンナ派は、社会がハディース(預言者ムハンマドの言行に関する伝承)を典拠とする預言者のスンナ(慣行)に立脚すると主張し、11世紀頃の西アジアで確立された。本研究は、スンナ派の形成と浸透の過程を明らかにすることに向けて、10～13世紀の西アジアにおいて「ハディースの徒」と自称したウラマー(イスラーム宗教知識人)に焦点を当て、彼らが、どのようにハディースを用いて、社会の様々な事柄をスンナに根拠づけたのか、その知的実践を社会史的に解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

スンナ派とシーア派というイスラームの二大宗派は、預言者ムハンマドの死(632年)から11世紀頃にかけての長い歴史の変容の中で徐々に形成された。スンナの典拠としてのハディースの重要性を強調した「ハディースの徒」が、ハディースをめぐる行っていた知的実践を社会史的視点から分析した本研究は、スンナ派形成の歴史を解明することに寄与するという学術的意義を持つ。また、宗派の歴史性に注目したことで、「宗派对立」の解決に向けた適切な対応を考えるための学術的基盤を提供するという社会的意義も持つ。

研究成果の概要(英文)：The Sunni sect, the majority of the current Muslim population, argues that their community should be based on the Prophetic Sunna (custom) authorized by Hadiths or traditions attributed to the Prophet Muhammad (d. 632). The establishment of the sect progressed from the 7th to 11th century. This research project focused on Ulama who called themselves “Ashab/Ahl al-Hadith” or “people of the tradition” in West Asian Muslim society between the 10th and 13th centuries. The goal of this research project was a social historical study on their scholarly practices to attribute various matters found in their society to the Prophetic Sunna by using their knowledge of Hadith. For the study, it summarized the historical outline of the Ashab al-Hadith, analyzed development of their theories by which they estimated the authenticity of Hadith, and discussed mutual influences between their scholarly practices and social conditions around them.

研究分野：初期・古典期イスラーム史

キーワード：ハディース ハディースの徒 スンナ派 ウラマー 社会史 西アジア

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

シリア内戦などのイスラーム地域の紛争は、スンナ派とシーア派の宗派対立と語られることが多い。しかし、宗派が異なるから争うといった本質論的言説は知的怠慢である。宗派は歴史的に形成され、社会状況に応じて変化するからである。宗派を理解するためには、思想だけでなく、それを支える知的実践の形成と変容の歴史を、社会と関連づけて論究しなければならない。

初期イスラーム史に関する最近の研究は、スンナ派とシーア派は、預言者ムハンマドの死(632年)の直後に同時に形成されたのではなく、イスラーム共同体の政治的内紛のなかで、まず少数派が独自の宗教思想を発達させて10世紀にかけてシーア派を形成し、多数派は、シーア派への反論などをとおして、預言者のスンナに依拠した共同体の護持を主張する教説を整備し、11世紀頃にスンナ派として確立したと説明する。しかし、曖昧な多数派として出発したスンナ派の形成と浸透の歴史には未解明の部分が多い。

スンナ派には二つの潮流が存在する。一つは、現実のスンナからの逸脱を批判する潮流である。この潮流は、主流ではないが、現代のイスラーム主義に強く影響することもある。思想研究で取り上げられてきた。もう一つの潮流は、現状をスンナに根拠づけて肯定する潮流である。思想研究も歴史研究も、この潮流に焦点を当ててこなかった。政権に協力的であるため政治問題を起こさず、社会を痛烈に批判して強烈な思想を展開することもなかったからである。とはいえ、スンナ派の主流をなすこの潮流の形成と浸透を解明することなしに、スンナ派の形成と浸透の歴史を解明することはできない。

2. 研究の目的

本研究は、現状肯定的なスンナ派主流の形成と浸透の歴史を明らかにすることに向けて、ハディース(預言者ムハンマドの言行に関する伝承)をめぐる知識体系であるハディース学の10世紀から13世紀にかけての西アジアにおける展開と、それを担ったウラマー(イスラーム宗教知識人)なかでも「ハディースの徒(Ashāb/Ahl al-Ḥadīth)」と自称したハディース学者の知的実践を社会史的に解明することを目的とした。ハディース学に着目した理由は、ハディースがスンナの重要な典拠であり、現実がスンナに基づくという現状肯定は、現実の様々な事柄について、それを支持するスンナの典拠となるハディースを提示し、その真正性を証明することで行われたからである。社会史的アプローチを採った理由は、そうしたハディースをめぐる作業の実態と、その成果の社会への浸透を明らかにするためには、それを担ったハディース学者の知的実践を分析し、それによって形成・展開されたハディース学を社会状況との相互影響の下で考察することが有効かつ不可欠であったからである。

上記の目的に向けて具体的に研究する課題として、本研究は以下の3点を設けた。すなわち、

【課題1:「ハディースの徒」の時代的・地理的分布の傾向の整理】、【課題2:ハディースの真正性判定理論の形成・展開の解明】、【課題3:「ハディースの徒」の知的実践と社会状況の相互影響の解明】である。

「ハディースの徒」は、先行研究において、9世紀のイラクで論証主義と対決し、スンナ派の現状批判的潮流につながると理解されてきた。これに対して、本研究では、より広い地域でより長期にわたって「ハディースの徒」を称する人々があり、現状肯定的潮流につながる人々も多いことに着目し、【課題1】への取り組みによって、いつ、どこに、どのような「ハディースの徒」がいたのかを整理した。その上で、【課題2】に関する研究作業として、「ハディースの徒」が書き残したハディース学の理論書を網羅的に分析し、彼らがハディースの真正性判定を巡って形成した理論の変化を跡づけた。そして、【課題3】に関する研究作業として、「ハディースの徒」が社会や政治の様々な事柄を論ずるためにハディースを用いて著した論説を分析し、それらの論説が援用した理論、社会における受容・評価、ハディース学における著述や理論に与えた影響を明らかにした。

本研究は、以上の3つの課題への取り組みを通して、ハディースを用いて社会や政治の様々な事柄をスンナに根拠づけたウラマー「ハディースの徒」の知的実践を社会史的に解明し、スンナ派の形成と浸透の歴史過程を考察することを目指した。

3. 研究の方法

本研究は、研究代表者の個人研究として遂行された。一方、個人研究に付随する視野狭窄の危険を回避するために、内外の研究者との意見交換を積極的に行った。同様に、本研究の対象である古典的なハディース学を継承する現在のウラマーとの意見交換も行った。これは、現在のウラマーの教養と認識を参照することで、本研究を、ムスリム(イスラーム教徒)たちの信仰にとって根本的な宗教的テキストであるハディースを外から一方的に議論する「オリエンタリズム」的なものにしなないための工夫である。この取り組みに際しては、研究代表者の本務先である同志社大学が、イスラーム諸国の宗教系高等教育・研究機関と結んでいる協定を活用した。また、史料・データの整理に当たっては、アラビア語の運用能力とイスラーム史・思想に関する専門知識を持つ博士後期課程以上の研究協力者を適宜選定した。

本研究は、当初、平成26年度から30年度までの5年間の研究期間を予定していたが、1年間の延長を行ったため令和元年度までの6年間の研究期間となった。延長の理由は、平成29年度に本研究を基課題とする国際共同研究加速基金が採択され、30年度にアメリカとトルコで在外研究を行ったことにより、その成果をも取り込んで本研究をより精緻に遂行するためであった。

本研究は、内外の研究者との議論や在外研究をとおり国際的な環境の下で遂行されたが、基本的な研究方法は、「ハディースの徒」が書き残したアラビア語文献を収集し、それらの文献を読解・分析していくという堅実な方法であった。各年度に行った具体的な研究作業は、以下のとおりである。

平成 26 年度は、【課題 1: 「ハディースの徒」の時代的・地理的分布の傾向の整理】に関する研究作業として、8~15 世紀のアラビア語文献に見られる「ハディースの徒」を調査し、「ハディースの徒」と自称し、あるいは、呼ばれた人々が、いつ、どこで、どのような活動をしたのかを整理した。また、【課題 2: ハディースの真正性判定理論の形成・展開の解明】と【課題 3: 「ハディースの徒」の知的実践と社会状況の相互影響の解明】に関わる研究作業の準備として、スレイマニエ図書館(トルコ共和国イスタンブル市)とテヘラン大学中央図書館(イラン・イスラーム共和国テヘラン市)において、校訂・翻刻が刊行されていないハディース学関連文献の写本調査を行った。

平成 27 年度は、【課題 2】に関する研究作業に中心的に取り組み、前年度に収集した史料の中から、10 世紀から 13 世紀にかけての西アジアで活躍した「ハディースの徒」が書き残した論説や理論書を読解し、そこで用いられ、また論じられていたハディース学の理論をデータベースに整理し分析した。この作業の一環として、トルコ共和国イスタンブル市とレバノン共和国ベイルート市の図書館・書店で補足的な史料調査を行い、写本のコピーや刊本、関連する研究文献などを収集した。

平成 28 年度は、27 年度までに達成された【課題 1】と【課題 2】の成果の整理と再検討を行いつつ、前年度までに収集したアラビア語写本史料を中心に、「ハディースの徒」の著作の読解を継続した。また、ロンドンの大英図書館でアラビア語写本の補足的な調査を行った。なお、この年度に予定していたイランでの調査については別の研究プロジェクトの経費で行い、その機会にテヘラン大学イスラーム神学部でハディースを研究しているマアレーフ Majid Ma'āref 准教授と面談し、意見交換を行った。そして、【課題 3】に関する研究作業として、それまでに収集した文献史料の中から、「ハディースの徒」がハディース学以外の政治や社会の様々な事柄について、ハディースとハディース学の理論を用いて著した論説の読解と分析を開始した。

平成 29 年度は、28 年度に開始した【課題 3】に関する研究作業を継続し、「ハディースの徒」がハディース学の理論をどのように用いて著述を行い、それらの著作が社会や政治の状況をどのように反映し、どのように受容されたのかを分析した。本研究を基課題として、国際共同研究加速金(16KK0043)の交付内定を得たので、30 年度に予定していた本研究全体のとりまとめを、ジョージタウン大学(アメリカ合衆国、ワシントン DC)における国際共同研究として行うこととし、29 年度中にその準備も進めた。ジョージタウン大学における海外共同研究者として予定しているジョナサン・ブラウン Jonathan A.C. Brown 准教授については、本研究の研究代表者が分担者として参加していた NIHU 現代中東地域研究 AA 研拠点の資金で日本に招聘し、12 月 17 日に同志社大学で本研究との共催で国際ワークショップを開催した。

平成 30 年度は、【課題 1】【課題 2】【課題 3】の成果を総合的に考察し、本研究全体を総括した。この総括作業を、上記の国際共同研究基金による在外研究として 4 月から 12 月にかけてジョージタウン大学において行い、本研究全体の成果を国際的な水準に照らして検証した。それに引き続いて、平成 31 年 1 月から 3 月にかけてイブン・ハルドゥーン大学諸文明協調研究所(トルコ共和国イスタンブル市)で在外研究を行い、同大学の学長でハディース学者であるシェントユルク Recep Şentürk 教授とともに講演を行うなどし、本研究のここまでの成果についてムスリムの研究者の批評を仰ぐことで、「オリエンタリズム的」な研究となることを防ぐ工夫を行った。

令和元年度は、1 年間の研究期間の延長期間に当たる。延長の理由は、本事業を基課題とした上記の国際共同研究加速基金による研究事業として平成 30 年度に行った在外研究の成果を踏まえて、本研究の総括と公開に関わる作業をより精緻に行うためであった。

4. 研究成果

以上の研究方法による研究作業を 6 年間にわたって実施した結果、以下の成果を得た。

まず、【課題 1: 「ハディースの徒」の時代的・地理的分布の傾向の整理】に関わる研究作業から、「ハディースの徒」と自称するウラマーの集団は、9 世紀のイラクで現状批判的な伝承主義者の集団として明確に現れたが、10 世紀にかけてその主流がイラクからホラーサーン(イラン北東部)に移り、それに伴って、ハディースが伝える預言者のスンナ(慣行)に照らして社会や政治の現状を批判する傾向が減退し、現状をスンナに根拠付け、それらのスンナを伝えるハディースの真正性を証明することで現状を肯定する傾向が強まっていくことを明らかにした。この成果は、平成 26 年 8 月に中東工科大学(トルコ共和国アンカラ市)で開催された World Congress for Middle Eastern Studies (WOCMES Ankara 2014)において口頭で発表した。

【課題 2: ハディースの真正性判定理論の形成・展開の解明】に関する研究作業から得られた成果は、10 世紀のホラーサーン(イラン北東部)において、イスナード(伝達経路)の多寡に依拠してハディースの真正性を判定する理論が形成され、その理論が、多彩な内容のハディースについて、真正性の高さを演出する技術を生み出したことが明らかにしたことである。そして、この理論と技術は、11 世紀から 13 世紀にかけて、イラクやシリアの「ハディースの徒」の間でも盛んに研究・活用されるようになり、当時の社会の様々な事柄をハディースに根拠づけて肯定、あるいは、批判する論説が数多く書かれるようになったことも明らかにした。この成果は、平成

27 年 11 月に東京大学東洋文化研究所で開催された国際シンポジウム、*Ulama and Islamists: Reflections on the Boundaries between Two Identities* に招待された際の講演として発表した。

【課題 3：「ハディースの徒」の知的実践と社会状況の相互影響の解明】に関わる研究作業からは、以下の 2 点が明らかになった。すなわち、(1) 11 世紀から 12 世紀に、ホラーサーンからシリアにかけての各地で活動した「ハディースの徒」は、10 世紀後半のホラーサーンで提起されたハディース真正性判定理論を柔軟に活用し、社会や政治が要請する様々な事柄をスンナに根拠付けてイスラーム的な価値を保証する著作を数多く執筆し、それらの著作はハディース学者の知的実践の中で評価されると同時に、社会的にも広く受容されたと考えられること。(2) しかし同時に、「ハディースの徒」は、彼らの権威の源泉であるハディースの真正性の価値を維持するために、真正性判定理論を厳格化せざるを得ず、そのことが、13 世紀後半にかけて「ハディースの徒」の活動を停滞させていったことである。以上 2 点の成果については、平成 29 年 5 月に九州大学で開催された日本中東学会第 33 回年次大会において口頭で発表するとともに、本研究が同年 12 月に同志社大学で共催した国際研究集会、*Utilizing the Prophetic Legacy: Questions of Justice and Authority in the Muslim Societies* においても英語で発表した。

本研究は、以上の【課題 1】【課題 2】【課題 3】の各成果について、平成 30 年度の在外研究などを中心に、内外の研究者の批評を仰ぎ、それらの批評を盛り込んで各課題の成果を総合的に考察し、研究全体を総括した。この総括作業によって、以下の 3 点を解明した。すなわち、(1)「ハディースの徒」を称したウラマーたちが、知識人としての評価を得るために行った知的実践の成果を用いて、周囲の社会的・政治的要請にも良く応えていたこと。(2) そうした社会や政治に対する協力的な姿勢が、彼らの社会的権威にもつながっていたこと。そして、(3) 社会や政治の多くの側面を、ハディースをとおしてスンナに結びつけようとする彼らの姿勢と活動が、スンナに則った共同体の一員と自らを想像する人々、すなわち、スンナ派の形成に大きく貢献したと考えられることである。

これらの成果は、平成 30 年 11 月に本研究を基課題とする国際共同研究加速基金の研究事業の一環として、ジョージタウン大学外交学院アルワリード・ビン・タラール王子ムスリム・キリスト教徒理解センターで開催した国際ワークショップ、*The Hadith in Islamic Thought and Practice* における研究発表、および、平成 31 年 2 月にイブン・ハルドゥーン大学諸文明協調研究所で開催された講演会、*Hadith and Scholars: Its Formation and Challenges* における招待講演として英語で発表した。また、令和元年 11 月に京都大学で開催された 2019 年度東洋史研究大会においても、本研究の総括をとおして得られた成果を口頭で発表した。

上記の研究成果は、本研究の計画段階で予測されていた成果にほぼ沿ったものであり、本研究はその全体を通して計画通りに遂行され、スンナ派の形成と浸透の歴史過程の解明に寄与したと評価される。また、本研究の作業をとおして構築した「ハディースの徒」の経歴・著作などを整理したアラビア語のデータベースは、ハディース学の歴史的展開を研究するための知的基盤となることが期待される。研究代表者は、本研究の成果の一部としてこのデータベースを内外の研究者と共有する準備を進めており、データベース公開のプラットフォームとしてアラビア語と日本語のウェブサイトを開設した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 森山央朗	4. 巻 76
2. 論文標題 預言者ムハンマドを「継いだ」学者たち	5. 発行年 2014年
3. 雑誌名 基督教研究	6. 最初と最後の頁 1-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 5件/うち国際学会 4件）

1. 発表者名 MORIYAMA Teruaki
2. 発表標題 From Khurasani Ashab al-Hadith to Mamluk Shafi'i School: Succession to the Classical Hadith Studies
3. 学会等名 Sixth Conference of the School of Mamluk Studies (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森山央朗
2. 発表標題 ホラーサーン系「ハディースの徒」の著述活動：10 - 13世紀のハディース列挙型論説の盛衰
3. 学会等名 2019年度東洋史研究大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森山央朗
2. 発表標題 預言者ムハンマドのことばをめぐる知識体系
3. 学会等名 「聖人」のことば：先入観を超えて（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Teruaki Moriyama
2. 発表標題 Scholarly Practice of the Medieval Ashshab al-Hadith and Their Social Authority
3. 学会等名 The Hadith in Islamic Thought and Practice (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Moriyama Teruaki
2. 発表標題 Scholarly Practice of Khurasani Ashab al-Hadith and Spread of the Prophetic Sunna in the Medieval Muslim Society
3. 学会等名 Hadith and Scholars: Its Formation and Challenges (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森山央朗
2. 発表標題 10-12世紀におけるホラーサーン系「ハディースの徒」の理論展開と自己認識
3. 学会等名 日本中東学会第33回年次大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 MORIYAMA Teruaki
2. 発表標題 Staging the Authenticity: How Medieval Hadith Scholars Used Hadith in Their Literature
3. 学会等名 Utilizing the Prophetic Legacy: Questions of Justice and Authority in the Muslim Societies
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 MORIYAMA Teruaki
2. 発表標題 Who were 'Ashab al-Hadith'? : The Historical Development and Geographical Spread of the Traditionalists in the Medieval West Asian Muslim Societies
3. 学会等名 2016 KAMES International Conference (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Teruaki Moriyama
2. 発表標題 The Intellectual Practice of the Classic Ulama: Case of the 11th Century 'Ashab al-Hadith' or Hadith Scholars
3. 学会等名 Ulama and Islamists: Reflections on the Boundaries Between Two Identities
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 Teruaki Moriyama
2. 発表標題 Rethinking about 'Ashab al-Hadith': Their Geographical and Historical Distribution and Variety in Ideology and Activity
3. 学会等名 World Congress for Middle Eastern Studies, WOCMES Ankara 2014
4. 発表年 2014年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 小原克博・勝又悦子(編)、村田晃嗣・木原活信・小原克博・塩尻和子・岩崎真紀・四戸潤弥・勝又悦子・平岡光太郎・森山央朗(著)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 教文館	5. 総ページ数 304 (263-295)
3. 書名 宗教と対話 : 多文化共生社会の中で	

〔産業財産権〕

〔その他〕

森山央朗研究室

<http://mktb-moriyamat.jp>

上記URLは、「ハディースの徒」と自称したウラマーたちの経歴・著作を整理したアラビア語データベースを公開するためのプラットフォームとするとともに、本研究を中心とした研究代表者の研究成果などを公開するための日本語とアラビア語によるウェブサイトである。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	岡本 恵 (OKAMOTO Megumi)		
研究協力者	篠田 知暁 (SHINODA Tomoaki)		